

西洋音楽の記譜研究 書かれたものと響くもの

平成27年度 活動報告

書かれたものと響くもの「記譜法」(ノーテーション)は、芸術資源研究センター設立の準備段階から、美術と音楽、伝統音楽の3つの領域をまたぐ共通のテーマとして設定されてきた。異なる分野の人間が共同で行なう研究のなかから、新しい発想や研究の視点を得ることを企図している。そうしたなかで、このプロジェクトは西洋音楽を中心とした記譜への新しいアプローチを行なうことを考えている。とくに、音楽上の記譜に関して、書かれたものと、実際の音との間の関係性を研究しようとするものである。

以下の二つのテーマを設定して研究を行なう。

(1) 西洋の古楽における多様な記譜のなかから、音楽の構成の論理を読み解いていく。特にバロック時代の記譜においては、書かれた音と実際に演奏される音との間にずれがあった。記譜されたものと記譜されないもの、あるいは習慣として伝えられるものとの関係性に着目し、記譜のメカニズムを解明する。

(2) 現代音楽(西洋と日本)における記譜のなかから図形楽譜をとりあげ、音楽のあり方の何に变化が起きたのかを解明する。特にジョン・ケージなどのアメリカの実験作曲家たちの不確定性の音楽における図形をもとにした多様な記譜のあり方を研究し、実際に演奏を行なうことによって、記譜のメカニズムと結果としての音のあらわれとの相関関係を解明する。

プロジェクトのメンバーとゲストの研究員による研究会を毎月行ない、記譜に関する諸問題について学び、議論を行なう。各自がそれぞれの研究を持ち寄って、経過報告をし、意見交換を行ない、成果発表へと繋げていく。

2015年度は、赤塚健太郎氏(成城大学)と三島郁氏(本学音楽学部非常勤講師)をお招きしてバロック音楽とバロック・ダンスの舞踊譜について講演をしていただいた後、バロック音楽とバロック・ダンス(樋口裕子氏)による公演を行なった。空間的な動きと身体の動作、時間性を統合した舞踊譜が実際にどのようにダンスのステップとして読み取られるのかについて、実演をまじえて知ることのできる貴重な機会となった。

2016年度は、現代の図形楽譜を中心として、伝統音楽や美術との接点を探るレクチャー・コンサートを行なう予定である。現代音楽と日本の伝統音楽、美術が交錯する場から、書かれたもの(見るもの)と響くものに関わるノーテーションに、新たな角度から切り込んでみたい。

柿沼 敏江(音楽学部教授)